

目に觸れた自然のある一部に感興を催ふし、それを書いて畫にするといふやうなものは氏には望めない、今日の高い鑑識の上から見て、淺薄とか綺麗とかいふ評を下すのは酷で、十年、否五年前迄はあれでよかつたのである。出品の中では、**三五二**『松島の景』が一番よいやうに思つた。

岡 均 平 氏

三點の靜物畫中、一番よく畫けてゐるのは**三六九**『水仙』であらう、氏の畫には潤ひがある、位置の取り方も悪くはない、この上は、各自の物質が今少し明らかに現はして欲しい。

以上のほか、長谷川曾一氏の**二一四**『早春の野邊』は、何が主眼で畫いたのか、組立の上に批難がある。星野光の助の**二一七**『生活』は、人物の形が崩れてゐる。中央の藁屋根の、只一つ明るいのも變だ。萩生田文太郎氏の**二一五**『庭の隅』は、平板でそして何等の餘情がない。竹内久子嬢の靜物三點、そのうち**二六九**『馬具』は、色も澁く、一體に描寫が親切であるから、見た心持がよい。松原一風氏の作のうちでは、**三一八**『初夏の暮』が傑出してゐる、道路をモ少し器用に畫いて欲しかつた。此他、河上涼花、川村信雄、福原馬三郎、三上知治、氏原作次郎、中村元吉、宇野辰吉等數氏の出品があつた。

概觀するに、年々水彩畫の進歩は著しいもので、特に朝に夕に、筆を執つて居らるゝ、青年諸君の進歩の速なるは、驚嘆すべき事實である。若し此勢にして挫折することなく進みゆくならば、臆ては、世界に於ける水彩畫國なる、英吉利を凌ぐこと

も、決して難くはあるまいと思ふ。茲に吾等の水彩畫の進歩向上を祝し、萬歳を唱へて評論の筆を擱く。

## うばさ

こゝは太平洋畫會展覽會々場の、第一第二第三室である、繪を見る人がどんな事を言ふてゐるだらう。

■夏目君の『お稽古』の前で○此お母さんはビロードの着物を着てゐるね、イヤニハイカラな嫉アだ△見晴しがイ、ナ、こんな處に住みたい、家賃はイクラ位ひだらう■望月君の『戸山の原』○草箒の行列か■瀧澤君の繪○ワルク吉田君を眞似たものだ△この青白い無氣味な色をヒュードロノノ的といふ■平木君の『松島』の前○ホントに此通りよ、今年は往つて見たまへ■藤島君の『おせんころがし』○誰れか知つてゐるかこのイワレを何でも此突出てゐる岨から、阿仙といふ女が海へ轉がりこんだのだらう君の處の妹さんはタシカお仙さんと云つたね、そんな處へやりたまふな■竹内嬢の『馬具』の前で、老人と子供○ソラ博物館で見たらう、コレは昔しの鞍と鐙で、殿様がお馬に召すのには皆これであつた■萩生田君の『庭の隅』○丁度西洋草花の種子の入つてゐる袋のやうなものですれ△ソーさ、先生は西ヶ原の農事試験場のお役人だもの■河合君の『藪』の前で○さぞ蚊の澤山居ることだらう。